

べ、第4章では、全戸の明治以後の世帯主の職業の変遷を聴取により把握し、第3章の社会環境の変化によって集落機能はどのように変わっていったか、その実態を述べた。

芦峯寺は、標高約400m、常願川右岸の河岸段丘上にある現在162戸から成る集落である。この集落は奈良から平安にかけて修験者が住みついたのがその始まりだと言われ、立山信仰の発展とともに、江戸時代には宿坊村としてその全盛期を迎えた。江戸時代の芦峯寺は33坊5社人から成る一山組織（佐伯）と門前の佐伯、宗教的機能には全く参与しない先住民志鷹という2つの氏族、3つの階層で構成されていた。33坊の衆徒は夏は立山に籠り冬には各担当国に巡教（配札檀那廻り）に出かけた。立山へ信仰登山客を導くのは、登山ガイドと宗教的教化を兼ねる「中語」で、主として門前の佐伯がこれにあたった。参詣者は平年6～7,000人は下らず、芦峯寺は繁栄した。ところが、廃仏毀釈により神仏習合の立山信仰は、その根本を失うことになり、参詣者は激減した。宗教的機能の担い手であった一山組織の受けた衝撃は大きく、転職を余儀なくされる者が相次ぎ村外へ移住する者も多く、現在33坊のうち子孫が村内に残存しているのは17軒にすぎない。門前の佐伯や志鷹には一山ほどの動揺はみられず、中語の経験を生かして山岳ガイドとして生計をたてる者が多く、移住する者も一山組織ほど多くはなかった。

一方、明治以後、近代登山が勃興し、その後スポーツ登山の時代を経て、交通の発達と相俟って一般登山客も増加すると、芦峯寺は山岳ガイドと登山基地としての性格を強めた。しかし、登山基地として安定したのも束の間で、鉄道がさらに延長され芦峯寺住民が所有するなど、登山基地としての性格は失われ、また、登山技術の進歩、交通機関の発達、山小屋の整備により山が大衆のものとなるに及び、ガイドは不要になり芦峯寺はガイドの村としての機能も失った。

戦後、サラリーマン化が著しく進み、現在世帯主の83%がサラリーマンであるが、芦峯寺に特徴的なのは、立山山岳観光地区内の33の山小屋のうち18軒を芦峯寺に住民が所有するなど、依然として山に積極的に労働の場を見出だそうという点である。芦峯寺が登山ルートからも国内公園内からも離れてしまいがちながら、依然として昔からの山岳の中に山小屋経営を通じて強い勢力を持っていることは注目に値するであろう。1,000年以上も続いている立山との密接なつながり、立山とともにある村という誇りがその一因であるように思える。

ごみ処理施設の立地とごみ資源化に関する考察

渡 辺 公 江

ごみ処理施設は、「迷惑施設」といわれて住民からさらわれる。特殊建築物の一つである為、その立地は一般に地域住民から反対される傾向にあり、地元住民の「施設立地の賛同」は、ごみ処理施設の立地の場合、何よりも重要な要因である。「住民の賛同」を得られなければ、立地予定地がいかにか、①環境アセスメントを行なって科学的に公害の蓋然性を検討し問題のない適地と思われても、②収集・輸送の効率がよく、その結果、清掃費用のうちの人件費が節減されるにしても、その場所の立地が実際に不可能なことは、数々の裁判例が示す通りである。この、「住民の賛同」を得る為に、たとえ

ば、焼却処理施設の場合、施設の焼却の際に出る余熱を利用した何かを施設に隣接してくっつけてつくり、住民への見返り施設とする、ということがおこなわれている。しかしその余熱の利用方法をみれば、ほとんどが、老人ホームや温水プールへの給湯といったもので、地域毎のバラエティに乏しいことに気づく。もちろん、老人ホームや温水プールは公共施設の中では、まだ数も充分とは言え難く、それらを焼却処理施設に隣接して建設することも意味がないことではない。しかしながら、同じ余熱を利用するならその地域の特徴をつかんだ、バラエティに富んだ余熱利用を行なうことにし、理想的には地域住民がその余熱利用の方法をしることで、施設の建設に対し積極的になりはじめるような、そんな、地域に順応した焼却処理施設ができれば、迷惑施設というごみ処理施設のイメージもしだいかわっていくのではないだろうか。そういった考慮のあとがみられる焼却処理施設の余熱利用、たとえば、川崎市の市民プラザへの給湯・冷暖房、東京都の売電、札幌の地域暖房等を私は興味深く思っている。

愛知県豊橋市の資源化センターは、ごみ処理とし尿処理、それに家畜ふん尿の処理をあわせ行なう廃棄物処理施設であるが、「都市農村環境結合計画」の名のもとに、地域に順応した廃棄物処理施設として完成した。当センター内の焼却処理施設で発生する余熱は、隣接して建設された温室団地に送気され、16戸の農家の手で、冬はトマト栽培、夏はメロン栽培に役立てられている。資源化センター周辺は、農村施設等総合整備事業の対象範囲にくみこまれたが、この範囲は、豊川用水通水後、施設園芸が急速に発展してきたところであり、周辺農家の多くがかねてからガラス温室をもつことを希望していた。そういった状況の中で、焼却処理施設の余熱を送気するガラス温室を建設しようという市の発想は、周辺農家の注目を集め、その結果、施設立地がスムーズにすすんだと聞いている。またこのあたりは、施設園芸の他に、主に畜産業や畑作が行なわれているが、これは家畜ふん尿の処理施設やコンポスト処理施設も地域に貢献できることを意味しているといえる。しかし実際には、市の手違いで、鶏ふん発酵施設が未完成、またその他の家畜ふんがし尿処理施設で処理されていないし、コンポストも周辺農家ではなく、一般市民に家庭菜園用に配られているのは、少し残念である。

資源化センターは、現在、清掃界の注目をあつめている施設で、昭和55年4月にオープンしたばかりであるが、できあがってみると、上記の点以外にも問題はあり、市は手ばなしで喜ぶこともできない。しかしながら、施設をなるべく地域に順応したものにしようとした姿勢は興味深いものであった。